



地域ボランティアプログラム① 松木日向緑地プログラム

里山保全ボランティア ～首都大で竹を切ろう～

報告

2019/02/22

里山保全ボランティア～首都大で竹を切ろう～

2月22日（金）、本学南大沢キャンパスの敷地内にある松木日向緑地にて、「里山保全ボランティア～首都大で竹を切ろう～」と題し、里山保全活動の体験会を行いました。

今回は、首都大生と本学の教職員を対象に参加者を募集しました。当日は、応募してくださった学生3人、教員1人の一般参加者に加え、松木日向緑地プログラムからは、3年目（リーダー）の学生が1人、2年目（サポーター）の学生が1人、1年目の学生が5人参加しました。

・竹の間伐体験

13号館前に集合し、参加者全員で自己紹介や準備運動をした後、加藤英寿先生（牧野標本館 助教）が管理されている竹林へ行きました。そこでは、手入れしているエリアとあえて手を入れていないエリアを見比べながら、プログラムのメンバーが、松木日向緑地の現状や竹の特徴について説明しました。

次に、12号館の裏側の竹林で実際に竹の間伐を行いました。まずは、1か所に集まり、リーダー（3年目）の学生がデモンストレーションをしながら、伐採する時のコツや安全面の配慮事項を丁寧に説明していました。「伐採した竹をどの方向に倒せば良いか」、「伐採した後の竹をどのように処理すれば良いか」等、何も考えずただ伐採するのではなく、見通しをもつことが大事だと伝えていました。

デモンストレーション後は、2グループに分かれ、参加者が竹の間伐に挑戦しました。自分の背丈の何倍もある竹を見て、最初は不安そうにいましたが、リーダー（3年目）、サポーター（2年目）の学生が見守る中、参加

者全員が無事に竹を伐採することができました。1本、2本と伐採しているうちに、コツをつかんだようで、体験時間が終わる頃には、初めて竹の伐採を経験したとは思えないほど、上達していました。

・竹を薬剤で枯らす

竹林の拡大を防ぐ方法には、本プログラムで取り組んでいるような、「のこぎりを使った竹の間伐」以外にも様々な方法があります。

その一つが、「薬剤で枯らす」方法です。今回、キャンパスを管理している施設課の職員の方にお越しいただき、実際にその様子を見せていただいたり、体験させていただいたりしました。

まずは、竹にドリルで穴をあけます。その穴から薬剤を注入し、テープで穴を塞ぎます。作業はたったこれだけです。竹を1本ずつ伐採していくよりも短時間で、簡単に処理することができます。その作業を体験した学生は、「こんなに簡単に処理ができるのか」と感動していました。

一方で、薬剤を使用することにより、処理を施した竹の周辺では、たけのこの収穫ができなくなってしまうといったデメリットがあります。現在は、エリアごとに分けて処理・管理をしているそうです。それぞれの方法のメリット・デメリットを考えたいので、その目的に合った処理をしていくことが大事だと教えていただきました。



△ 竹を枯らす薬剤を注入している様子

・グループワーク

最後に、12号館の教室に移動し、プログラムのメンバーが準備したグループワークを行いました。このグループワークでは、松木日向緑地の現状・課題を踏まえて、松木日向緑地がどのような場所であるべきかを考えました。

まずは、プログラムのメンバーが、自分たちの取組として松木日向緑地での里山保全活動や多世代交流活動について発表し、その後、リーダーやサポーターの学生を中心に、以下のステップでディスカッションを進めました。

1. 松木日向緑地の現状や課題は何か？
2. 松木日向緑地はどのような存在であるべきか？どのような場所にしたいか？
3. 松木日向緑地をより良いものにするために、どのような取組ができるか？

プログラムのメンバーの一人ひとりがそれぞれの視点で、日頃から感じている課題を共有し、さらに、一般参加者の方々も自分の考えを積極的に話してくださったことで、ディスカッションが活発に行われていました。

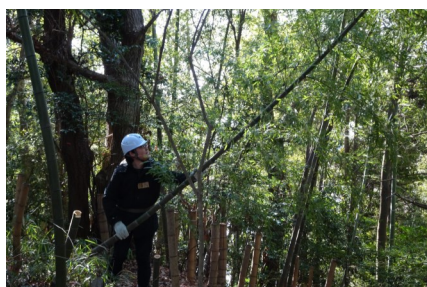
さらに、学内にいても気付かなかった現状を知ったり、学内にあってもあまり行く機会のない緑地にどのように関わっていくのか等を具体的に考えたりすることを通して、首都大生として、首都大に主体的に関わっていくことの重要性やその価値を確認することができたようでした。



△ ディスカッションの様子

～参加者の感想～

- ・「里山保全活動についての話し合いが印象に残りました。ホタルやタヌキが身近にいることを知り、とても興味深かったです」
- ・「4月にたけのこ掘りがあると聞きましたので、参加させていただきたいと思います」
- ・「ディスカッションでは、皆色々考えていると感じました。今後はコンセンサスをとりながら、それらを1つのモデルにしていけると良いと思います」



△ 間伐体験の様子